新聞資料を通してみる 九份における文化的景観の保存と開発

伊藤　空[1]・波多野　想[2]

[1]非会員　琉球大学大学院　観光科学研究科（〒903-0213沖縄県中頭郡西原町字千原1番地）
E-mail:k148105@eve.u-ryukyu.ac.jp

[2]会員　琉球大学准教授　観光産業科学部観光科学科（〒903-0213沖縄県中頭郡西原町字千原1番地）
E-mail: sohatano@tm.u-ryukyu.ac.jp

本研究では，観光地化が始まった当初の九份を対象に，当時の九份の観光地化に関わった人々が九份の文化的景観をどのように捉えていたのか，また彼らの間にどのような意見の対立があったのかを明らかにすることを目的とする．調査資料としては新聞資料を使用し，九份における鉱業時代の風景や歴史，文化の保存あるいは変容に関する記事をもとに，観光地化が始まった当初の九份の観光地化の各関係者のせめぎ合いを分析していく．

文化的景観の保存について台灣大學の「九份聚落保存與觀光發展計畫」により提案された総体的な景観保存に着目し，一方で観光地開発により増加した違法建築による景観変容との関係性を考察する．

Key Words :*Jiufen, preservation and development of cultural landsvape, production of tourist destination,*

1.　はじめに

(1)　研究の背景と目的

台湾の新北市瑞芳区に位置する九份は，1971 年に金鉱が閉山して以降，急速な人口流出により衰退していた．その後 1980 年代後半に，鉱業時代の風景が多く残されている点や，当時の台湾での文化観光の盛り上がり，映画や広告などの媒体での取り上げなどにより注目を集め，現在は観光地として賑わう地域となっている [1)].

観光地化が進むにつれて九份においては，独特な景観の保存に向けた活動がおこなわれるようになっていった．例えば台北縣からの委託を受けた台灣大學建築與城鄉研究所（以下，台灣大學と略す）によって 1990 年に提案された「九份聚落保存與觀光發展計畫」では，計画作成段階での地域住民の参加を促しつつ，九份の特殊な風景や歴史，文化の保存及び持続発展に着目した調査，計画がおこなわれており，この計画をもって台灣大學は，当時観光地としての発展に期待していた九份の地域住民や行政などに対して，鉱業時代の風景や歴史，文化などを含めた人文資源の保存という観点を提示した [2)].

一方で九份では，観光地化が始まった当初から観光地化に伴う地域社会や風景の変容を問題視する声があがっている．行政院文化建設委員會が 1994 年に出版した『九份歴史之旅』によれば，商店の増加に伴う建築物の改築など，観光客の過剰な流入がかつての鉱山町に大きな影響を与えており，特殊な鉱業文化の保存が，九份の観光地化における最も重要な課題であるとされている [3)].

以上から九份の観光地化の最初期においては，独特な鉱業時代の景観の保存と開発との対立関係があったと考えられるが，当時実際に九份の景観を巡って，どのような意見の対立があったのかを明らかにする研究はまだおこなわれていない．空間は物理的な実践に関わる様々なアクターの相互作用やせめぎ合いのなかで動的に形成されるものであり，景観を保存，開発しようとする各アクターの関係性をみることで，九份における観光地の形成プロセスをより動態的に捉えることができると考えられる [4)]．よって本研究では，観光地化が始まった当初の九份を対象に，当時の九份の観光地化に関わった人々が九份の文化的景観をどのように捉えていたのか，また彼らの間にどのような意見の対立があったのかを明らかにすることを目的とする．

(2) 研究方法

本研究ではまず，文献資料をもとに観光地化に伴う動向を整理する．その後，新聞資料に記載されている，九份における鉱業時代の風景や歴史，文化の保存あるいは変容に関する記事をもとに，観光地化が始まった当初の九份の文化的景観を各関係者がどのように捉えていたのか，また関係者間でどのような意見の対立があったのかを分析していく．

表-1 1970 年代から 1990 年代までの九份に関する『中國時報』

記事分類	件数
文化的景観の保存あるいは開発	51
観光に関する記事	81
映画，芸能に関する記事	8
その他時事問題などに関する記事	58
合計	198

対象年代は金鉱が閉山された 1970 年代から 1990 年代までとし，収集する新聞資料については，國家圖書館が保有している電子データベースを用いて，様々な新聞資料に記載されている九份に関する記事について悉皆的に調査をおこなった結果，他紙に比較して数量が多く，また対象年代中に瑞芳区が所属していた台北縣版を含め，多くの地方版が所蔵されている『中國時報』に定める[1].

資料収集をおこなった結果，1970 年代から 1990 年代までに発行された『中國時報』に掲載されている記事のうち，九份に関する資料が 198 件存在した．そのうち九份における文化的景観の保存あるいは開発に関する記事が 51 件，観光に関する記事が 81 件， 映画，芸能に関する記事が 8 件，その他時事問題などに関する記事が 58 件となった（表-1）．

2. 観光地化に伴う九份の動向

本章ではまず，文献資料や九份に関する先行研究をもとに，観光地化以前の九份の歴史的概要を明らかにしていく．

現在の新北市瑞芳区に位置する九份は，1800 年代後半に基隆河付近で砂金が発見されて以降，鉱山町として栄えた地域である．金鉱が発見された当初は清の台湾巡撫が設置した金砂局によって採金がおこなわれていたが，1895 年に台湾が日本の統治下に移って以降は，日本の鉱山会社である藤田組の管理のもとで鉱業がおこなわれ，また 1918 年には，台陽礦業株式會社（以下，台陽礦業と略す）が全鉱業権を買収している [5]．1897 年には 500 人余りであった人口は，1939 年には 18000 人を超えるほどに増加していたが，その後産金量が減少するにつれて人口も次第に減り始め，1971 年に台陽礦業が金鉱を閉山して以降，1979 年には 6700 名，1991 年には 3600 名余りにまで減少している [6].

急速な人口の流出により九份は一時衰退をみせるが，1987 年 4 月には衛星観測により，九份にまだ多くの金鉱が残されていることが話題となったほか，同年 6 月には外来の芸術家たちによって提案された藝術村構想が各種メディアに取り上げられたことで，台湾の人々から再び注目を集めることとなった [7]．その後，1988 年から 1990 年にかけては，頌德里一帯の地域住民や台北縣からの委託を受けた台灣大學によって「九份大竿林地區空間營造之設計準則」，「九份聚落保存與觀光發展計畫」が作成された．また九份で撮影された映画『戀戀風塵』（侯孝賢，1987）や『悲情城市』（侯孝賢，1989），『無言的山丘』（王童，1992）などの公開に加え，「藍山珈琲」の広告に九份の写真が使用されたことなどもきっかけとなって，周辺市街地から多くの観光客が訪れるようになり，観光地として賑わいをみせることとなった [8]． これに伴って，珈琲館，茶楼，飲食店が急速に増加したほか，現地にて九份の歴史や鉱業文化について解説をおこなう文史工作室が複数現れるなどしている [9].

3. 新聞資料からみる九份の文化的景観の保存

本章では，1970 年代から 1990 年代までに発行された『中國時報』をもとに，九份の文化的景観を当時の関係者たちがどのように捉えていたのかを分析していく．

(1) 「九份聚落保存與觀光發展計畫」による総体的な景観保存風潮の高まり

「九份聚落保存與觀光發展計畫」は，観光による九份の再発展の方向性を定めるために，台北縣からの委託を受けた台灣大學によって作成された計画である [10]．この計画では，1)九份の歴史及び社会発展の分析，2)地域住民の経済状況，3)建物の使用状況，4)社会，歴史資源の発掘，5)建物の空間形式，類型，6)交通状況，7)環境影響要素の各種調査がおこなわれている．これらの調査結果をもとに台灣大學は，九份においてはその総体的な村落環境が観光客を引きつけていると考え，一つの歴史的な村落としての九份全体の保存に主眼をおいた計画方針がとられている．また計画作成段階での地域住民の積極的な参加を促すことで，村落の価値を地域住民に認識させ，地域住民と専門家とが平等な立場で計画を作り上げていく関係性の構築を図る．

1990 年 2 月 18 日には，台灣大學の夏鑄九が「九份聚落保存與觀光發展計畫」についての中間報告会を主催し

ている[11]．報告会には当時の台北縣長である尤清や賴添發瑞芳鎮長，呉滄富縣議員，林添麟瑞芳鎮代表會會長などの行政関係者を始め，その他にも九份の地域住民が多数参加している．この報告会において夏鑄九は尤清に向け，1)資源の保存・発展と新建築風潮の阻止，2)公共サービスの充実，3)計画の円滑な執行にむけた，縣府と各単位とが協調する重層的政策決定，4)専門家，民衆の代表者を交えた準備委員会の設立を提案している．また夏鑄九は，九份全体の発展に向けて，地域住民の積極的な計画参加を必要とする考えを示している．一方で地域住民は尤清にむけ，観光客が利用するにあたって九份への交通網を整備する必要があると意見を述べている．

1992 年 9 月 8 日には計画に関する第 2 次座談会がとりおこなわれ，台灣大學側から行政関係者，里長などの住民代表者に向け，九份の自然や文化などの資源を活用した「生態博物館」建設の構想が提案された[12]。この座談会においても台灣大學は，九份の金鉱としての歴史やそれによって形成された風景，文化などの人文資源の保存を重視する考えを示している。

また同年 10 月 29 日に開催された期末報告会では，違法建築の取締についての議論がおこなわれた[13]．九份においては閉山以降も，台陽礦業が土地及び建築物を所有しているが，台陽礦業は建築物の使用者に階層の増築を原則認めていないにもかかわらず，台陽礦業への許可のない改築による独特な景観の喪失が以前から問題視されていた[14][15]．

この期末報告会においては，夏鑄九が違法建築物は九份の全体的な風景や歴史，文化を破壊するものであり，放置すれば九份の観光地としての価値が損なわれると主張したほか，地域住民からも外来の資本による配慮のない違法建築の林立が，九份の村落全体としての景観を破壊しているとの声が上げられた[16]．

このように台灣大學の「九份聚落保存與觀光發展計畫」に関する各報告会が開かれるなかで，九份全体としての文化的景観保存に関する議論が行政，民間を巻き込み活発に行われた．

(2) 計画の停滞とその後の人文資源保存活動の実施

地方関係者の間で総体的な文化的景観の保存の気運が高まる一方で，1993 年以降，「九份聚落保存與觀光發展計畫」の実施についての遅れが指摘されるようになる．

1993 年 4 月 11 日には，呉滄富縣議員らが九份を訪問し，九份の里長たちとの会話の中で，台灣大學による計画の完成や，東北角海岸風景特定區への編入を急ぐ必要があり，また先行して駐車場や公園の拡大にも取り掛かるべきであると主張している[17]。また同年 6 月 9 日に呉滄富らが九份の公共設備建設と開発計画進行のための予算を獲得した記事においても，「九份聚落保存與觀光發展計畫」の作成が進んでおらず，土木遺産の変容などの問題が依然として存在していることが主張されている[18]．

一方で地方関係者による人文資源保存に向けた活動は，1993 年以降活発化している．1993 年 2 月 28 日には，観光客によるゴミ問題の解決に向け九份環保義工隊が結成され，九份全域の清掃活動を行っている[19]。また同年 4 月 25 日には，張英傑が個人で金九鑛石文物館を開幕するなど，地域住民が積極的に九份の人文資源保存活動に参加あるいは自ら実施していることが伺える[20]．またこれらの活動については呉滄富を始めとする行政関係者も参加しており，行政と地域住民との対話のもとでそれぞれの活動が進められていったと考えられる．

4. 新聞資料からみる九份の観光地化に関わる保存と開発の対立関係

この章では，収集した新聞資料のなかにみられた九份の文化的景観の保存と開発との対立関係に着目し，実際にどのような意見の対立がおこっていたのかを分析する．

(1) 「九份聚落保存與觀光發展計畫」による総体的な景観保存と違法建築

1992 年 10 月 29 日に開催された「九份聚落保存與觀光發展計畫」の期末報告会において，違法建築についての議論がおこなわれた[21]．地域住民から外来の資本による配慮のない違法建築の林立が，九份の村落全体としての景観を破壊しているとの主張がされた際に，当時の瑞芳鎮長である周清龍は，九份の古い建築物群は現代の地域住民の生活には適合しておらず，違法建築の阻止は困難であると述べたほか，九份における珈琲館などの新建築は観光の利益を生んでおり，取締の必要はないと述べた．これに対し夏鑄九は，違法建築物は九份の全体的な風景や歴史，文化を破壊するものであり，放置すれば九份の観光地としての価値が損なわれると主張した．また計画の一環として進行している東北角海岸風景特定區への編入も危ぶまれ，さらに安全面からは坑道が地下にある九份での高層建築物の危険性について説明している．最終的に期末報告会は尤清によって，違法建築取り締まりの強化をおこなう方針でまとめられている．

総体的な文化的景観の保存に対する意見が民間の側からもあげられている一方で，一部の行政関係者によって，違法建築の開発による文化的景観の変容が，観光客の利益を生んでいるケースや，古い建築物群が現代の地域住民の生活にとって不適合であるとの見方が示されており，総体的な文化的景観の保存と観光客の需要や現代的な生活に合わせた開発との意見の対立がみられる．

(2) 違法建築の取り締まり

1993 年 8 月 23 日，台北縣政府の違法建築排除団体が 10 戸の違法建築について，排除計画を進めていたが，これに対し周清龍は取り締まり軟化を要求し，排除作業の延期が決定された[22]．周清龍によれば，観光客の急激な増加によって，閉山後長く衰退していた九份に再発展の兆しがが見え始めており，早急な違法建築排除の実行は再発展の勢いを握りつぶしてしまうと主張している．

また 1993 年 12 月 6 日には，瑞芳調解委員會主席の楊阿希と当時の基山里長が，九份の空き地上に，簡易の建物と駐車場の設置を計画していたが，付近住民から風景を阻害するものとして危険視され，鎮公所に詰めかけた数十名の地域住民により計画の撤廃が要求された[23]．両名はこの計画について，台陽礦業から認可を得ている合法なものであると主張し，当初は住民へ理解を促していた。しかし 7 日には地域住民に向けて，基山里における違法建築の充満は事実であるが，もし摘発を強要すれば今後里民の損失がさらに増すばかりであり，協調した発展の維持が必要であると主張し和解している[23]．

以上のように九份の観光地化の最初期においては，1992 年に違法建築の取り締まりが問題化されて以降，実際に行政や民間側から違法建築を取り締まろうとする声があがっているが，実際に違法建築が排除されることはなかった．

5. 結語

新聞資料からみる九份の観光地化の最初期における文化的景観の保存活動は，台灣大學が「九份聚落保存與觀光發展計畫」のなかで提唱した総体的な景観の保存の考えに沿って進められており，1993 年以降には地域住民と行政との連携のもと，様々な人文資源保存活動がおこなわれている．一方で当時，台陽礦業の土地所有問題に起因する特殊な住宅市場のもと，九份での商業機会に目をつけた外部資本の流入，開発が急激にすすみ，結果として九份の文化的景観の変容が起こっていた．

外部資本による九份の開発は，土地問題も助かり容易かつ早急に利益を得ることのできる行為であり，点的な文化的景観の開発による施設の変容が，当時いたるところで行われていたと考えられる．一方で，台灣大學により提唱された総体的な文化的景観の保存の考えは，地域住民との対話を通じ，上述の点的開発の対抗軸として提案された，集合的に風景全体に価値を認める計画であるといえる．このような点的な開発と総体的な保存とのせめぎ合いのなかで九份の観光地化が推し進めらていったたと考えられる．

補注

(1) 『聯合報』，『自由時報』なども含めた台湾の各新聞会社は，それぞれが国民党寄り，民進党寄りなどの政治的立ち位置をもつものと認識されており，このような各新聞会社による論調の違いもを含めた九份の観光地化に関する研究については別稿に譲る．

参考文献

1) 張瓊文：九份歴史之旅，pp.2-3，行政院文化建設委員會，1994.
2) 夏鑄九：九份聚落保存及觀光發展計畫，未刊本.
3) 同 1)，pp.28-29.
4) ルフェーブル, H.（斎藤日出治訳）：空間の生産，青木書店，2000.
5) 同 1)，pp.22-28.
6) 唐羽：臺陽公司八十年志，pp.187-194，臺陽公司，1999.
7) 同 6).
8) 林産旻：觀光之眼：觀光對九份空間所産生的衝擊，淡江大學，建築學系，2004.
9) 同 6).
10) 同 2).
11) 中國時報：九份開發計劃 尤清支持 簡報構想不賴 唯經費計劃須周全 夏鑄九提出四項建議，p.14，1990/2/19.
12) 中國時報：瑞芳應定位於都會遊憩城鎮 台大城鄉所計劃支持，咸盼從九份與金瓜石著手發展觀光，p.14，1992/9/9.
13) 中國時報：九份聚落保存及觀光報告｜引發學者，民代與鎮長辦論 鎮公所維護原貌 取締新違建，p.14，1992 年 10 月 30 日.
14) 中國時報：九份地區首次出現公萬型房屋出售 每坪約八萬元起 只有使用權沒有産權也不能登記，p.14，1995/5/9.
15) 中國時報：戀舊情懷 金瓜石重燃第二春 礦場聚落民族廟會 最佳遊憩據點 景觀待妥善維護，p.14，1992/8/6.
16) 同 13).
17) 中國時報：民代訪「金鄉」九份里長抒心聲 促將九份、金瓜石納入東北角風景區 獲允辦理，p.14，1993/4/12.
18) 中國時報：觀光局允開發金瓜石、九份觀光 將於 84 年度編列予算 短期内可能併入東北角風景區計劃，p.14，1993/6/10.
19) 中國時報：沿街撿垃圾 義工不嫌苦 維護「九份之美 地方人士付諸行動，p.14，1993/3/1.
20) 中國時報：金九鑛石文物館開幕 介紹金瓜石、九份地區礦石文化 免費參觀，p.13，1993/4/6.
21) 同 13).
22) 中國時報：鎮長請求顧全地方商機 公僕手下留情 九份違建商家 緩拆，p.13，1993/8/24.
23) 中國時報：九份違建案 業主辯稱未玩弄特權，p.14，1993/12/7.
24) 中國時報：基山里檢舉違建案和平落幕 里長以和爲貴 盼里民勿互相檢舉沒完沒了，p.14，1993/12/8.

（2015.4.6 受付）